

特集 大震災 石巻ボランティア

東日本大震災から6カ月。今号は地震・津波で多大な被害を受けた石巻市でのボランティア活動を特集した。学生の寄稿と、震災直後に現地に駆けつけた韓国人留学生の崔哲洵さん(経済3)に話を聞いた。また、震災の影響で外国人の帰国が相次いだにもかかわらず、長年暮らした石巻市に留まり、被災した地元の人たちに寄り添った石巻専修大 学理工学部准教授のリチャード・ハルバーシュタットさんにインタビューした。

若い力で復興の手助け

猛暑…がれき・泥と格闘

学生部が呼びかけ SKV学生ら70人参集



▲ 仲間と泥かきに励む守屋さん(中央)

このボランティア活動さんあること。そして通じて私が一番感じたこと多くのボランティアが必要だということ。一部は、地域では、普段通りの生活に戻りつつあるようでした。が、少なくとも、私が活動した石巻市尾崎地区はそんな状況ではありません。この辺りでは陸から水が引かず、池の中に家が建っている状況でした。ここから少し進んだ尾崎

うれしかった「ありがとう」

守屋 雄介さん(法3)寄稿

このボランティア活動さんあること。そして通じて私が一番感じたこと多くのボランティアが必要だということ。一部は、地域では、普段通りの生活に戻りつつあるようでした。が、少なくとも、私が活動した石巻市尾崎地区はそんな状況ではありません。この辺りでは陸から水が引かず、池の中に家が建っている状況でした。ここから少し進んだ尾崎

若い力を復旧・復興の一助に……。学生部(阿藤正道学生部長)は、石巻市でのボランティア活動を8月に開催した。4月に続いて2回目で、2回に分かれ(A班/8月6〜9日・B班/同9〜12日)、学生、教職員ら合計約70人が猛暑の中、石巻市尾崎地区でがれきや泥の撤去などに汗を流した。参加したSKV(専修神田ボランティア)代表の守屋雄介さん(法3)はB班に体験談を、活動メモとともに寄せてもらった。



▲ 北上川に沿って目的地に向かう学生たち

こと、それは復興の進んでいない地域がまだたくさんある。それは復興の進んでいない時期でしたので、石巻から押し寄せた津波により流された家屋やがれきが目立ちました。現在は、使えなくなった建物を壊してさら地にしたところなどが目につきます。復興への道のりを歩み始めています。感じました。

石巻市でのボランティア活動となりました。石巻に着いた日、大々学近くにある日和山公園の台から石巻市の現状を見学しました。4月に来たときは、震災から3週間ほどしかたっていないので、石巻市に到着したとき、被災地に行き、ボランティアとして活動することだと思えます。私たちが大学生が被災地のためにできること。それは実際に被災地に行き、ボランティアとして活動することだと思えます。

素人でも力になれる

守屋さんメモ 活動

- <8月9日>
 - ・けがに注意する。
 - ・復興はかなり進んでいる。石巻駅周辺は。
 - ・日和山近くの学校の校庭では子供たちが野球をしていた。日常に戻りつつある。
 - ・4月には店がほとんど開いてなかったが、今回は営業している店も多い。
 - ・大学近くには仮設住宅ができています。
 - ・復興しているエリアと、そうでないエリアがある。
 - ・がれきは自分にとってはゴミ、しかし持ち主にとっては宝物が隠されているかも。
 - ・無理せず明日から活動しよう。

- <8月10日>
 - ・水たまりにサギがいる。
 - ・地面は凸凹多い。
 - ・砂ぼこりが舞っている。
 - ・家が池の中に建っている。水が引いていない。
 - ・言葉にならない風景。ひどい。何もかもがめっちゃくちゃ。大川小学校周辺。
 - ・あまりにも悲しい現実。
 - ・ハエが多い。
 - ・復興に何年かかるんだろう。
 - ・ボランティアの数、圧倒的に足りない。
 - ・家を壊しても、あの場所に住めるか? また建て物建てられるような状況?
 - ・達成感がボランティアの報酬。
 - ・思ったほど作業は進まない。
 - ・ボランティアの無力さを実感。
 - ・尾崎地区、動物はたくさんいた。カモ、さぎ、とび、せみ、のら猫。でも人はほとんどいない。
 - ・人気(ひとけ)がない。
 - ・小さな行動の積み重ねが大きな成果となる。

- <8月11日>
 - ・3月11日から5カ月目。
 - ・黙とうした。
 - ・亡くなった命に想いをめぐらす。
 - ・残されたものの使命は何? きっと精いっぱい、このまち(尾崎地区)を復興させ、さらに発展させること。
 - ・ボランティア、普段の生活ではできないことができた。こう考えると、十分な報酬を手にすることができたんだと思う。
 - ・素人でも力になれる。
 - ・今回のボランティアが今後につながっていけばいいな。今回は「きっかけ」。

- <8月12日>
 - ・松島、「観光客は昨年と同じ時期の半分以下」(観光船の券売所のおじちゃん)
 - ・東京に津波が来たらどうしよう。どうやって自分の身を守ろうか。

な成果につながります。一人ひとりの力はどうなるか。なにか小さくてもその積み重ねによってだれかの喜びにつながるのです。ボランティアには報酬がありません。しかし、「ありがとう」の一言や、今日りします。



▲ B班参加のみなさん



▲ 石巻専修大学の前で(A班)



▲ 左が崔さん(石巻市で)

早朝、車から降りると身を切る寒さに身体が震え強くなった。2年後に専修大に入学。東大経済学部に入社。東京・三鷹市で新聞奨学生としてアルバイトをした。転機は突然訪れた。バイクで朝刊を配達中に乗用車に跳ね飛ばされ、病院に運ばれた。身体を強くしたい。今を大切に生きていきたい。チャンスがあったら、また石巻市を訪ねたいと思っている。

メンバーはほとんどが韓国人だが、日本人、中国返る。夜、東京・新宿にあるキリスト教会のボランティアグループ40人と共にシヤトルバスに乗り込んだ。

震災9日後に現地へ 炊き出しや泥さら

失い、悲嘆にくれる被災者。崔さんは抱き合せて涙を流した。崔さんは「韓国の10年強を歩む日本に経済の勉強をしよう」と2002年に来日。2年後に専修大に入学。東大経済学部に入社。東京・三鷹市で新聞奨学生としてアルバイトをした。転機は突然訪れた。バイクで朝刊を配達中に乗用車に跳ね飛ばされ、病院に運ばれた。身体を強くしたい。今を大切に生きていきたい。チャンスがあったら、また石巻市を訪ねたいと思っている。

「被災地の様子にいても立っていられず、すぐにかつてきました」ソウル生まれの韓国人留学生、崔哲洵さん(経済3)は3月11日の東日本大震災の9日後、地震津波で被災した石巻市へ出発。清掃、泥の除去や炊き出しに奮闘した。崔さんは3月20日深夜、東京・新宿にあるキリスト教会のボランティアグループ40人と共にシヤトルバスに乗り込んだ。現地は車両の通行が可能な道路だけが復旧。道路沿いに重なり合った車、破壊された建物、電柱、ゴミの山、転がる漁船……。海岸沿いの街は、廃墟のようでした。崔さんも「日本はアジアの中心。そこでもう一度勉強したい。日本を離れてしまじみ思いました」専大に復学。黒田彰三ゼミに入り、都市計画や地域振興を学んでいる。「バイト生活は変わりませんが、がむしゃらだった以前と違い、大学を楽しくするようになりました」再来日して1年後の大震災。甚大な被害に、耐えがたい「痛み」を受けた人々がいる。生死をさまようような体験をした自分と重なった。「未来につなげるために、今を大切に生きていきたい。チャンスがあったら、また石巻市を訪ねたいと思っている。」

「子を失った被災者と抱き合せて泣いた」

韓国留学生の崔哲洵さん(経済3)

「被災地の様子にいても立っていられず、すぐにかつてきました」ソウル生まれの韓国人留学生、崔哲洵さん(経済3)は3月11日の東日本大震災の9日後、地震津波で被災した石巻市へ出発。清掃、泥の除去や炊き出しに奮闘した。崔さんは3月20日深夜、東京・新宿にあるキリスト教会のボランティアグループ40人と共にシヤトルバスに乗り込んだ。現地は車両の通行が可能な道路だけが復旧。道路沿いに重なり合った車、破壊された建物、電柱、ゴミの山、転がる漁船……。海岸沿いの街は、廃墟のようでした。崔さんも「日本はアジアの中心。そこでもう一度勉強したい。日本を離れてしまじみ思いました」専大に復学。黒田彰三ゼミに入り、都市計画や地域振興を学んでいる。「バイト生活は変わりませんが、がむしゃらだった以前と違い、大学を楽しくするようになりました」再来日して1年後の大震災。甚大な被害に、耐えがたい「痛み」を受けた人々がいる。生死をさまようような体験をした自分と重なった。「未来につなげるために、今を大切に生きていきたい。チャンスがあったら、また石巻市を訪ねたいと思っている。」